

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K02746

研究課題名(和文)大学生に対する発達障害理解教育プログラムの開発と展開

研究課題名(英文) Development and application of education on college students' understanding of developmental disabilities

研究代表者

岡田 有司 (Okada, Yuji)

東京都立大学・大学教育センター・准教授

研究者番号：10584071

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では発達障害理解教育の開発を行った。具体的には障害学生支援に関わる専門家らの協力を得て障害理解教育のコンテンツを作成し、大学の授業内で障害理解教育を実施した。その効果を測定するために、障害理解教育実施前、実施直後、実施後一定期間後に調査を実施し、発達障害に対する態度の変容がみられるかを分析した。それにより、発達障害に対する認識(顕在的態度)だけでなく、潜在連合テストによって測定された潜在的態度についても改善することが明らかになった。開発された発達障害理解教育は350名以上の学生を対象に実施されるとともに、発達障害について理解を深めるための教職員向けのコンテンツについても作成された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

発達障害者の割合は少なくないが、発達障害について学ぶ機会は限られている。この背景には、学校教育の中で発達障害理解教育が十分に実施されていないことがある。本研究では発達障害理解教育のコンテンツを開発するとともに、その内容が発達障害に対する理解の向上や態度の改善に有効であることを複数回の調査研究に基づき検証した。科学的な手法で有効性が確認された発達障害理解教育は貴重であり、こうした教育を展開していくことが発達障害者にとって生きやすい社会をつくることにつながるという。

研究成果の概要(英文)：This study developed an education on understanding developmental disabilities. At first, we created contents of education directed at understanding disabilities in cooperation with experts of disability support and provided it in college classes. Pre, post, and follow-up survey was conducted to examine the effect of education and the changes in students' attitudes toward developmental disabilities were analyzed. As a result, it was shown that implicit attitude which was measured by implicit association test (IAT) was improved as well as explicit attitude. Education on understanding developmental disabilities was provided to over three hundred fifty students. Educational material for faculty and staff which help understanding of developmental disabilities was also created.

研究分野：教育心理学

キーワード：発達障害 障害理解教育 大学生 潜在連合テスト

1. 研究開始当初の背景

発達障害を抱えながら大学生活を過ごしている学生は一定数存在する。こうした学生が大学生活に適応するためには、個別支援だけでなく、周囲の学生がいかに発達障害を理解しサポート的な態度を形成できるかが重要だと考えられる。しかし、発達障害という言葉自体は広く認知されるようになってきたが、発達障害について正確に理解できている学生は少ない。

この理由としては、大学入学前までに発達障害について学ぶ機会が限られていることが挙げられる。また、学生支援機構の調査によれば、大学においてもそのような機会は乏しい(学生支援機構, 2017)。従って、科学的な効果検証に基づく大学生を対象とした発達障害理解教育プログラムを開発することが重要である。こうしたプログラムを開発し普及することが、発達障害学生に対する偏見を低減し支援的な環境をつくることにつながるといえる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、科学的な効果検証に基づきながら大学生向けの発達障害理解教育プログラムを開発し、それを大学教育の中に展開することである。具体的には、発達障害に対する理解の深化や態度変容につながる教育内容・方法について、顕在的指標と潜在的指標の双方から効果検証を行う。そして、そこで得られた知見に基づき大学生向けの発達障害理解教育プログラムを開発し、授業等で展開することで発達障害への理解を促進する。

3. 研究の方法

本研究ではまず、障害理解教育に関する先行研究や文献に基づき、発達障害理解教育のための教育内容・方法を開発した。そして、開発した教育プログラムを授業内で試行し効果を検証するとともに、検証結果に基づき教育プログラムを改善するという実践研究を行った。

障害理解教育の効果検証は顕在的指標だけでなく潜在的指標も用いて行った。これは、自己報告式の質問紙のような顕在的指標では、社会的に望ましい反応をしやすいことが明らかにされており、障害者に対する潜在的な偏見を捉えきれないことが指摘されているためである(Pruett & Chan, 2006)。顕在的指標として、本研究では発達障害に対する印象をSD法で測定したとともに、発達障害に対する認識を測定するため「障害者観尺度(河内, 2004)」も用いた。潜在的な指標としては、ペーパーベース版の潜在連合テスト(IAT: Implicit Association Test)を用いた。

これらの指標を用い、発達障害理解教育の「実施前(プレ)」「実施直後(ポスト)」「実施後一定期間経過後(フォローアップ)」に調査を実施した。そして、発達障害に対する認識や態度の変容が生じたかを分析することで、障害理解教育の効果を検証した。

4. 研究成果

(1) 発達障害理解教育のコンテンツ開発

障害学生への理解と支援に必要な理論や概念、発達障害を含む様々な障害学生の理解と支援の在り方、実際の支援の事例など、発達障害理解教育に必要な内容について、障害学生支援に関わる専門家の協力を得てまとめた。この成果は「吉武清實・岡田有司・榊原佐和子(編) 共生社会へ：大学における障害学生支援を考える 東北大学出版会」として出版され、その内容が発達障害理解教育に反映された。また、研究分担者らによって教員向けの発達障害理解のためのヒントブック「発達障害のある学生への対応について-教職員向けヒントブック(東北大学学生相談・特別支援センター特別支援室)」も刊行され、Webで公開された。

具体的な発達障害理解教育には以下の内容が含まれた。

特別支援教育の理念、現状

発達障害の定義、発達障害の大学生、合理的配慮

学習障害、注意欠如・多動性障害、自閉症スペクトラム障害の理解と支援の在り方

これらの内容について、90分×3コマで講義形式の授業を行った。授業では教員が説明をするだけでなく、これまでに出会った発達障害の人やその人に対する対応の在り方、自分の中の困難は何かといったテーマについて論述し、それに基づきディスカッションをしてもらった時間も組み込んだ。また、研究の過程で映像や書籍を通じた発達障害への間接的な接触経験も重要であることが明らかにされたことから、以下の「発達障害理解教育の効果検証」では発達障害者の映像教材もコンテンツに含めた。

(2) 発達障害理解教育の効果検証

試行的に開発した発達障害理解教育の効果検証を目的に調査を行った。大学生44名を対象に、発達障害理解教育を実施し、その効果を検証した。発達障害理解教育実施前(プレ)、実施直後(ポスト)、実施後1か月後(フォローアップ)に、顕在指標(SD法、障害者観尺度)と顕在指標(潜在連合テスト)からなる調査を実施し、発達障害者への認識や態度がどのように変化するかを検討した。SD法では「否定的な印象」が、障害者観尺度では「統合教育(に賛同するか)」「交流場面での

当惑」が測定された。

顕在的指標に関して、「否定的な印象」については、プレからポストについて得点が低下していた。また、「統合教育」「交流場面での当惑」については、全ての項目ではないが半数程度の項目において、プレからポストにかけて得点にポジティブな変化が生じていた。そのため、発達障害理解教育は発達障害への顕在的な態度についてポジティブな影響をもたらすことが示された。

次に、潜在的指標である IAT スコアの得点の変化について検討した。IAT スコアの得点が高いほど、発達障害に対して潜在的にネガティブな態度を持っていると解釈される。図 1 で示した

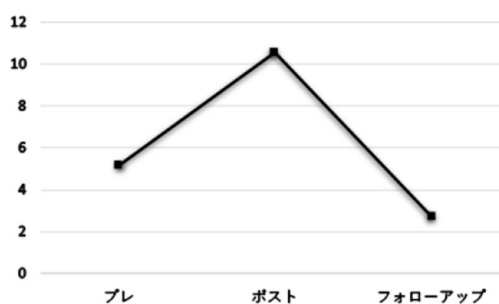


図1 IATスコアの変化

ように IAT スコアについてはプレからポストにかけて上昇し、ポストからフォローアップにかけて低下していた。またフォローアップの得点はプレの得点よりも有意に低くなっていた。ポストの時点で得点が上昇した理由としては、発達障害について学び障害に起因する困難や障害の身近さが理解され、一時的に発達障害に対する不安や脅威が高まったことなどが考えられる。しかし、フォローアップ調査では障害理解教育実施前よりも IAT スコアが低くなっており、障害理解教育は長期的には潜在的な態度の変容にポジティブに作用したといえる。

以上の研究から、顕在的指標と潜在的指標では変化のパターンに違いがみられたが、発達障害理解教育は発達障害に対する顕在的・潜在的態度の変容に効果があることが示された。

(3) 発達障害理解教育の効果検証

拡張接触仮説(Wright et al., 1997)に基づけば、発達障害への顕在的・潜在的態度は発達障害者と直接接触しなくても、映像や書籍等を通じて間接的に接触することでもポジティブに変容すると考えられる。実際に、本研究のデータ分析からも、直接的な接触だけでなく間接的な接触が発達障害に対する態度にポジティブに作用することが示された(岡田, 2020)。そこで、「発達障害理解教育の効果検証」では、「発達障害理解教育の効果検証」のコンテンツに加え、学習障害、注意欠如・多動性障害、自閉症スペクトラム障害それぞれについて、テレビで放映された実際の映像を視聴してもらった。その効果を検証するため、発達障害理解教育を受けた大学生 99 名のデータを分析した。調査内容は「発達障害理解教育の効果検証」と同様で、顕在的指標である SD 法と、潜在的指標である IAT スコアについて分析を行った。

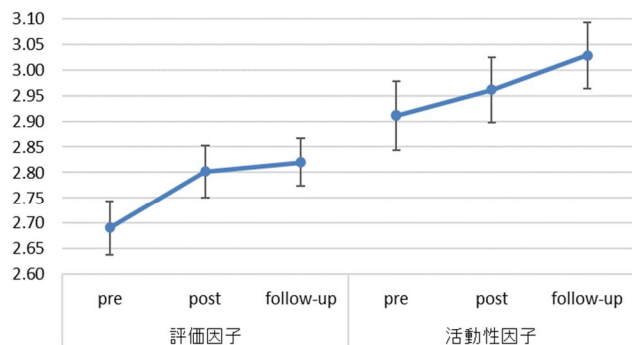


図2 発達障害に対するイメージの変化

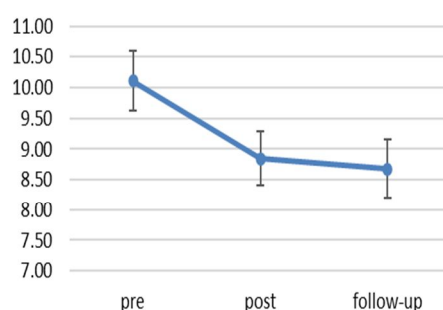


図3 IATスコアの変化

顕在的指標について、SD 法の項目に因子分析をかけたところ、評価因子と活動性因子の 2 因子が得られた。分散分析の結果、活動性因子については有意差はなかったが、評価因子についてはプレからポストについて得点が上昇しており、ポジティブな変化がみられた。IAT スコアについてはプレからポストにかけて得点が低下し、潜在的な偏見が低下していることが示された。以上の結果から、映像コンテンツを加えた障害理解教育についても、顕在的・潜在的態度の変容にポジティブな効果があることが示された。「発達障害理解教育の効果検証」と比較し、ポストの時点で IAT スコアが上昇するという変化は見られなかった。この理由として、映像を通じ実際の発達障害者のイメージを持てたことで、発達障害に対する過度の脅威や不安を感じなくなった可能性がある。

(4) 発達障害理解教育の展開

開発途中の発達障害理解教育も含め、2018 年度～2021 年度にかけて大学の授業内で障害理解教育を実施し、350 名以上の学生が受講した。今後も開発したコンテンツは授業内で活用され、更にその展開が見込まれる。また、出版・Web 公開した書籍や教職員向けのヒントブックを通じて、発達障害理解教育の展開に寄与できたと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 林慎吾・岡田有司	4. 巻 20
2. 論文標題 発達障害理解教育を通じた大学生の発達障害に対する態度変容 顕在的及び潜在的指標に注目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 障害理解研究	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Okada, Y.
2. 発表標題 The effect of education on Japanese university students' understanding of developmental disabilities: An investigation with implicit and explicit measures
3. 学会等名 32nd International Congress of Psychology（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岡田有司
2. 発表標題 大学生の発達障害者観に影響を与える要因
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会第29回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松川春樹・池田忠義・榊原佐和子・高橋真理
2. 発表標題 学生相談と障害学生支援の連携・協働に関する現状と課題(1) - 機関・部署の活動状況
3. 学会等名 第58回全国保健管理研究集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 池田忠義・松川春樹・榊原佐和子・高橋真理
2. 発表標題 学生相談と障害学生支援の連携・協働に関する現状と課題(2) - 担当者に焦点を当てて
3. 学会等名 第58回全国保健管理研究集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡田有司
2. 発表標題 大学生を対象とした発達障害理解教育
3. 学会等名 心理科学研究会 2019 年春の研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡田有司・林慎吾
2. 発表標題 障害理解教育を通じた大学生の発達障害に対する認識の変容 顕在的な指標に注目して
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林慎吾・岡田有司
2. 発表標題 障害理解教育を通じた大学生の発達障害に対する潜在的態度の変容：潜在連合テストを用いた検討
3. 学会等名 日本教育心理学会第60回総会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 荒木 寿友、藤澤 文	4. 発行年 2019年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 288
3. 書名 道徳教育はこうすれば もっと おもしろい	

1. 著者名 角南なおみ(編著), 榊原佐和子他(著)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 192
3. 書名 教育相談 (やさしく学ぶ教職課程)	

1. 著者名 吉武清實・岡田有司・榊原佐和子(編著)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東北大学出版会	5. 総ページ数 236
3. 書名 共生社会へ：大学における障害学生支援を考える	

1. 著者名 村上 香奈、山崎 浩一	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 276
3. 書名 子どもを支援する教育の心理学	

1. 著者名 榊原佐和子、池田忠義、長友周悟、高橋真理、鈴木大輔	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東北大学 学生相談・特別支援センター 特別支援室	5. 総ページ数 25
3. 書名 発達障害のある学生への対応について-教職員向けヒントブック	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	長友 周悟 (Nagatomo Shugo) (80751081)	東北大学・高度教養教育・学生支援機構・講師 (11301)	
研究分担者	榊原 佐和子 (Sakakibara Sawako) (00761389)	北海道大学・学生相談総合センター・准教授 (10101)	
研究分担者	高橋 真理 (Takahashi Mari) (20751069)	東北大学・高度教養教育・学生支援機構・助手 (11301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------